

## 色彩認識の象徴化 京劇の臉譜の表すもの

劉 湯冰 (COE研究員・RA) LIU Keping

一般の日本人の京劇に対するイメージは騒々しい音楽、甲高い歌声、そしてあの派手な臉譜（隈取り）だろう。

臉譜は、京劇の特徴が非常によく出ている特別な化粧法である。花臉の役柄にあたる者だけが施す化粧でもあり、全てのキャラクターの性格、地位生活習慣にあわせて、目、鼻、口、眉、額に異なる図案と色彩が勾（筆で書く）・揉（すりこむ）・抹（塗る）の技法によって施される。臉譜は歌舞伎の隈取りに似ているが、それは役者が色と形で自分の顔をキャンバスにして描きだすものである。そこには、中国人の持つ色に対するイメージ、形に対する感覚が表現されているのである。

臉譜の起源は南北朝と隋唐時代（368～907年）に行われた「仮面歌舞」であった。現在、臉譜に使われている色は主色、副色、界色（境界色）襯色（添え色）に分かれ、そしてそれぞれの色はそれぞれの性格を象徴、表現している。主色は基本の色で、人物の性格の特徴を示す。副色は主色の補助色で、隈取りに彩りを添え、図案を鮮明にする。襯色は、主色、副色のために使われたさまざまな他の色である。

隈取りは、どんなに色を使っても、臉紋がどんなに複雑になっても、必ず種類の主色で、人物の個性を表す。至誠、赤誠である関羽は紅で、廉直、正義の裁判官である包公は黒で、そして奸計と知謀の曹操は薄白で表している。以下それぞれの色が象徴するものを記してみよう。（赵梦林1992『京剧脸谱』p.25「脸谱的象征性表现手法」よりまとめたもの）

中国劇は人物の性格を表し、また人物本来の面目を乗り越えるために、美学の観点から最も代表的な特徴を誇張し臉譜を描いた。遠くから見ると性格が一目瞭然で、色彩ははっきりしていて、近くで見ると図案が精細である。「遠看顔色近看花」の技術効果がある。これは大胆なしかも巧みな表現手法である。人物の容貌（年齢、美貌）だけではなく、社会的地位、普段使っている武器まで図案で反映することができる。

紅が最上の色と言われる理由はおそらく紅を人間の生命力の象徴としようとする中国人の古くからの呪術宗教的な一面に起因しているのだろう。いずれにせよ、京劇の重要な要素である臉譜とは、中国人が色に託したイメージで性格を表象させようという試みなのである。

紅	紅は最も尊ばれる色で、至誠、忠義を象徴している。代表は関羽である。
紫	紅の次に尊い色で、血気盛んだが肅然とした性格を現す。紅や黒と併用し、若き日の直情・血気が年齢を重ねることで重厚さを増したことを示す。
黒	三国志の英雄・張飛や水滸劇の李逵など、沸き上がる激情をどうにも押さえられず、ついつい粗暴、過激な振る舞いをしてしまうものの、実際は無私で真心の固まりのような性格を表現する。また、包公に代表されるように、顔形が醜いものの廉直である性格をも示す。
白	白には猜疑、陰謀の気象が宿る。奸智に長けた武将は白を使う。曹操など典型的である。薄い白は必ずしも大悪という訳ではない。眉や目が細く描かれていればいるほど、奸計に長けた大悪人である。
藍	黒に近いが、より粗暴な一面を持つ色である。黒の上に藍を重ねた場合、単に粗暴、剛毅だけではなく知謀にも優れている。
青	緑に近い性格である。邪神、妖怪、物の怪、妖気、化け物などの色。
緑	藍色と似通った性格である。同じく凶暴でも緑は爆発気味、常に平静ではいられない性格を表す。
黄	粗暴で陰謀をめぐらす、それを表面に出さない人物に使う。勇戦する武将を示す。
灰	壮年の血気も薄れた様子を表すため、光に反射しないように顔料の油分を抜く。若い時に黒色だった者が老境にある状態を示す。
金	仏教の教典にある「身に金光を現す」にちなみ莊嚴、嚴肅を表す。神、仏に使われる色である。
銀	金に次ぐ高貴な色である。比較的に地位の低い神や仏に使われる。